

若者の生きる力を育む農山村 ~NPO法人地球緑化センター~

市民一人ひとりが社会を知るための自己学習の場をつくりたいと、「緑、人を育む」をキーワードとして1993年設立。個人や企業、学校などのニーズに応じて多様な社会教育・支援を行う。おもに次の3つのプログラムを実施。中国での砂漠緑化事業「緑の親善大使」(93年~)、若者を農山村に1年間派遣する「緑のふるさと協力隊」(94年~)、週末森林ボランティア「山と緑の協力隊」(96年~)。現在は9名のスタッフと複数のボランティアによって運営。今回、この「緑のふるさと協力隊」について事務局次長金井久美子さんにお話をうかがった。



事務局次長 金井久美子さん

■緑のふるさと協力隊とは

このプログラムは18~35歳の若者を全国各地の農山村に1年間派遣して地域での暮らしを体験してもらうと同時に、農山村の活性化をめざすというものです。農山村での活動内容は、農林水産業から観光業まで、その地域のニーズに応じて多岐にわたります。発足の背景には、1994年当時農山村では過疎化・高齢化が進み、山も畑も荒れていくという状況がありました。一方で、都市の若者たちが社会のできあがった仕組みにとらわれ、夢や希望を叶えられなくなっているような気がしていました。時代とともに農山村の状況や若者たちを取り巻く環境は変化します。けれど、若者たちが変わらず求め続けているのは、自分の体を使って生きること。多くの若者たちは、近代化しつくされた都会のオフィスより、自然に近い環境のなかに自分の夢や存在意義を求めていると思います。とりわけ、農業や林業といった自然を相手にする具体的な作業に憧れを抱いているような感じがしますね。一方では若いエネルギーを求めている農山村があって、もう一方で自然のなかで全身で生きてみたいと感じている若者たち。このニーズを結びつけるのが、緑のふるさと協力隊です。

■隊員を送り出す

こうした活動方針に賛同した若者たちがHPや各地で開く説明会を見て応募してくれます。応募してくる若者は学生や社会人などさまざまです。応募動機には、将来の仕事に生かせる経験をしたい、田舎暮らしを体験してみたいなどがあります。申込書や面接を通して熱意を確認し、農山村の現状や地域に入る際の心得などの事前研修を受けたあと、実際に現地に派遣されます。派遣先は必ずしも希望通りにはなりません。

一方、受け入れ先については、全国各地の地方自治体から隊員を受け入れたいという要請をいただきます。

地域の人たちだけでは何も変わらない、都市の若者の視点で刺激を与えてほしいというのが自治体側の一番の目的です。19期目を迎える2012年5月現在までのべ470市町村で受け入れていただきました。市町村からの希望と、若者たちの特性やさまざまな条件を鑑みながら両者を結びつけるのが私たちの仕事です。

■協力隊の‘三つの基本’と受け入れ自治体の声

協力隊が一番大事にしているのは、地域のよき応援者になること。そのために三つの基本を隊員に伝えています。一つめは、地域の人々の助けとなること。二つめが、謙虚な学び。実践や体験を通して、若者たちが社会、農山村、自然、そして生き方について謙虚な気持ちで学び成長していくことを非常に重んじます。地域に入るときには、本当に謙虚な気持ちにならないとなかなか受け入れてもらえないですから。三つめが、信頼関係の構築です。まず3か月間は与えられたことを、とにかく何でもやってみる。そして信頼してもらう。人間関係をつくったうえで、自分が深めたいこと、やってみたいことを、初めて言っていけるわけです。何かやりたいと思ったとき、信頼関係を築いたことで地域の人たちみんなが協力してくれるんです。

私たちが若者に望むのは、80~90代の高齢者の方々と向き合って伝統的なこと、昔の暮らしのようすや知恵などを学んだり、話を聞いたりしたことを通して、地域が元気になるプログラムを企画したり、発信すること。メッセージャーとなってその知恵を忘れかけているであろう地域の人たちに受け継いでいくような役割を一つでも二つでもやってほしいと思います。そこで、自分がどういうふうに生きていけばいいかということを少しずつ感じていきます。農山村は若者をしっかりと包み込み、育ててくれる。地域の教育力は素晴らしいと思います。

また、地域の人たちも外部の若者を受け入れることで、

いろいろ気づかされ、地域全体がいい方向に向かうことがあります。隊員を育てる喜びを感じてくださることもあります。あの隊員は来たときは役に立たなかったのにこういうふうに変ったんだよって。私たちスタッフが行くと自慢するんです。それは地域の自慢でもある。それを素直に受け入れてがんばる若者という、両方の関係が地域を活気づけているのだと思います。

■任期終了後、約4割の若者が派遣地域に定住

協力隊員が地域に行くとすぐ新聞やテレビ、町の広報誌の取材を受けます。あなたがみどりね、ふるさと協力隊来たのねって、みんなが知ってるのです。都会では自分に向き合ってくれる人は限られている。なのに、村中に自分の存在をこんなにちゃんと見てくれる人がいるということに、若者たちは心を動かされるのでしょうか。最初はうまく受け入れてもらえるかとても不安です。そのなかで一生懸命活動した結果として集落が好きになり、残りたい気持ちにさせられる。もっとこの地域を知りたい、できる限り恩返ししたいと思うのです。また、地域にどっぷり浸かる1年を通して、理想とする家族や、魅力ある大人に出会ったことで、愛着がわいてずっと住みたいくなるという隊員も少なくありません。

1年で地域を去ったとしても、毎年お祭りのときに帰るなどかわりは続きます。自分の心のよりどころとして、困ったことがあればいつでも帰ってこいよと言われるそうです。それが嬉しいんですね。第二の故郷ができたことは、その後の人生の励みになるのではないのでしょうか。いろいろな問題にぶつかっても、その人たちは支えてくれるとか、困らせたり心配をかけたりにしてはいけないとか、いろいろな歯止めにもなるでしょうし。

将来の生き方や進路に悩む若者たちにとって、農山村でしっかりと自分と向き合い、さまざまな経験をさせてもらうことが、本当に大事だと思います。派遣期間が終わると、彼らはどこでも生きていけますと言います。いろいろな苦難があっても乗り越えていけるのだろうと嬉しくなります。生きる力を身につける場でもあると実感します。

■協力隊の‘母’としての思い

今後はより多くの市町村に若者を行かせたい。若者が都市と農山村の懸け橋になると同時に、農山村の現状や日本社会の将来を考える人に育ってほしい。農山村で暮らすと獣害や耕作放棄地、高齢化などさまざま

第19期協力隊員：

大石紘数さん@宮崎県 諸塚村

諸塚村はとにかく山深い！
農林業や地域活動のほか、エコツアーのお手伝いもしています。進路に悩んでいたときに、協力隊に応募しました。諸塚村に来てもうすぐ半年。自分には何ができるのか、試行錯誤しています。いろいろな生き方や働き方を知ることはとても楽しいです。



第17期協力隊員：

玉村供子さん(旧姓：井上)@沖縄県 東村

村に住んで人と話さない日はない。誰かが自分を見てくれている居心地のよさに惹かれて移住を決めました。よく考えたい



えてやりたいと思ったことがあれば、ぜひ挑戦してください。もしその選択が失敗だったと感じることがあっても、必ずどこかで経験は生かされます。

な社会の現実に直面します。若者たちはそれらに対して自分たちは何ができるのか、真剣に考え始めます。農山村という場合は社会と向き合うためにとても大切です。若者たちがダメなのではなくて、彼らが輝ける場所—農山村—につなげるのが重要なのです。そういう場につなげるのが、大人の役割かなと思いますね。

一方、派遣後、定住先での仕事や生活をどう保障するかが大きな課題です。実は、3年間の派遣を計画しています。現在の1年間ではできることに限りがあるので、せっかくだと思いをもちて行った若者にはもう少し地域にいてほしいと思います。

また、都市の私たちがあまりにも自然と乖離されたなかで生きていて、生命を育む農山村の現状を知らなさすぎる。これを自分たちの問題と捉え、ともに行動してくれる人を育てていかねばなりません。若者たちが社会とかかわっていく一つの場として、協力隊を大きく展開したいと考えています。企業や大学、国全体での取り組みにしていきたいですね。

みんな与えられた直線で進みがちですけど、若者にとっては、回り道こそ、自分に出会えるんじゃないでしょうか。協力隊を含め、いろいろなものを見ることで、彼らの将来の糧になることが必ずあると思います。